

[7] チェコ

1. チェコの概要と開発課題

(1) 概要

1989年のチェコ・スロバキアにおける民主革命により共産党の独裁体制が終焉、1993年1月、スロバキアと分離、独立した。独立後は、右派のクラウス市民民主党（ODS）党首を首班とする中道右派連立内閣の下、内政は安定し、マクロ経済も安定して推移したが、経済改革の進展は国民の痛みを伴わざるを得ず、1997年、経済状況の悪化等を背景にクラウス内閣が総辞職した。その後1998年及び2002年の下院選挙で、左派の社会民主党（CSSD）が第1党となったものの、単独過半数を取るには至らず、少数内閣又は連立政権が続いた。2006年6月に下院選挙が行われ、ODSが第1党に復帰したものの、過半数を取ることはできず、2006年6月現在、連立内閣設立に向けた交渉が行われている。

外交面では、「欧州への復帰」を目指し、1995年12月に旧共産主義国で初めてOECD加盟を実現、1999年3月にはNATO加盟が実現した。また、2004年5月1日には、交渉を進めていたEU加盟を果たした。

経済面では、クラウス内閣の下で緊縮的なマクロ経済安定化政策が進められ、順調な成長を遂げつつ、低い失業率を維持してきたが、1997年に経済は転機を迎え、特にドイツの景気停滞の影響を受けた工業生産が落ち込み、貿易収支赤字が増大した。政府は、財政支出削減と賃金抑制を柱とする内需抑制策を導入したが、過去5年にわたり安定的に推移した通貨コルナは急落し、同年5月に変動相場制へ移行した。その後チェコ経済は、強い引締め策の副作用により、1997年第2四半期以降7期連続のマイナス成長という深刻な不況を経て、1999年第1四半期以降プラス成長に転じ、現在は外需を原動力に堅調な成長を続けており、2006年第1四半期の経済成長率は7.4%を記録した。

1995年にはハベル大統領（当時）、96年クラウス首相（当時）、2005年6月にはパロウベク首相等が訪日しており、我が国からは1996年に清子内親王殿下（当時）が、2002年には天皇皇后両陛下が、2003年には小泉総理（当時）が同国を訪問した。

チエコ

表-1 主要経済指標等

指 標		2004年	1990年
人 口	(百万人)	10.2	10.4
出生時の平均余命	(年)	76	71
G N I	総 額 (百万ドル)	101,581	—
	一人あたり (ドル)	9,130	—
経済成長率	(%)	4.4	—
経常収支	(百万ドル)	-5,595	—
失 業 率	(%)	8.3	—
対外債務残高	(百万ドル)	45,561	—
貿 易 額 ^(注1)	輸 出 (百万ドル)	76,568.83	—
	輸 入 (百万ドル)	76,966.28	—
	貿易収支 (百万ドル)	-397.45	—
政府予算規模 (歳入)	(十億コロナ)	891.23	—
財政収支	(十億コロナ)	-62.31	—
債務返済比率 (DSR)	(対GNI比, %)	8.2	—
財政収支	(対GDP比, %)	-3.3	—
債務	(対GNI比, %)	51.0	—
債務残高	(対輸出比, %)	70.7	—
教育への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
保健医療への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
軍事支出割合	(対GDP比, %)	1.8	—
援助受取総額	(支出純額百万ドル)	279.8	13.7
面 積	(1000km ²) ^(注2)	79	
分 類	D A C	—	
	世界銀行等	IBRD卒業国	
貧困削減戦略文書 (PRSP) 策定状況		—	
その他の重要な開発計画等		—	

注) 1. 貿易額について、輸出入いずれもFOB価額。

2. 面積については“Surface Area”の値（湖沼等を含む）を示している。

表-2 我が国との関係

指 標		
貿易額 (2005年)	対日輸出 (百万円)	43,172.6
	対日輸入 (百万円)	158,777.1
	対日収支 (百万円)	-115,604.5
我が国による直接投資	(百万ドル)	—
進出日本企業数	(2005年11月現在)	64
チェコに在留する日本人数	(人)	1,663
	(2005年10月1日現在)	
日本に在留するチェコ人数	(人)	265
	(2005年12月31日現在)	

表-3 主要開発指数

開 発 指 標		最新年	1990年
極度の貧困の削減と飢饉の撲滅	所得が1日1ドル未満の人口割合 (%)	—	
	下位20%の人口の所得又は消費割合 (%)	10.3 (1996年)	
	5歳未満児栄養失調割合 (%)	—	
普遍的初等教育の達成	成人 (15歳以上) 識字率 (%)	—	—
	初等教育就学率 (%)	—	87 (1991年)
ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上	女子生徒の男子生徒に対する比率 (初等教育)	—	
	女性識字率の男性に対する比率 (15~24歳) (%)	—	
幼児死亡率の削減	乳児死亡率 (出生1000件あたり)	4 (2004年)	21 (1970年)
	5歳未満児死亡率 (出生1000件あたり)	4 (2004年)	24 (1970年)
妊産婦の健康改善	妊産婦死亡率 (出生10万件あたり)	9 (2000年)	
HIV/AIDS、マラリア、その他の疾患の蔓延防止	成人 (15~49歳) のエイズ感染率 ^(a) (%)	0.1[<0.2] (2005年)	
	結核患者数 (10万人あたり)	11 (2004年)	
	マラリア患者数 (10万人あたり)	—	
環境の持続可能性の確保	改善された水源を継続して利用できる人口 (%)	100 (2004年)	100
	改善された衛生設備を継続して利用できる人口 (%)	98 (2004年)	99
開発のためのグローバルパートナーシップの確保	債務元利支払金総額割合 (財・サービスの輸出と海外純所得に占める%)	7.8 (2004年)	—
人間開発指数 (HDI)		0.885 (2004年)	—

注) []内は範囲推計値。

2. チェコに対するODAの考え方

(1) チェコに対するODAの意義

(イ) 市場経済への移行支援

1990年7月のG24閣僚会議においてチェコ・スロバキア支援の決定がなされたこと、分離独立後もチェコは民主化、市場経済への移行を図っていること等を踏まえ、市場経済への移行支援等を主たる目的として、研修員受入等の技術協力を中心に支援を行ってきた。

(ロ) 環境保全への支援

旧共産体制下における重工業重点の経済開発等のため深刻化していた同国の環境汚染に対し、環境保全支援の目的の一環として、廃棄物処理の専門家の派遣等の技術協力を行ってきた。

(2) チェコに対するODAの基本方針

これまで、市場経済化、環境保全支援を中心にODAを行ってきたが、中・東欧地域において高い経済発展段階にあることから、我が国からの支援も同国の発展に合わせた分野を中心に技術協力及び文化無償資金協力等を通して支援を行ってきた。2004年5月のEU加盟及び経済発展状況等を踏まえ、より民間ベースの交流及び協力の促進にシフトしていく。

3. チェコに対する2005年度ODA実績

(1) 総論

2005年度のチェコに対する技術協力は0.02億円 (JICA経費実績ベース) であった。2005度までの援助実績は、無償資金協力5.37億円 (交換公文ベース)、技術協力5.73億円 (JICA経費実績ベース) である。

チェコ

表-4 我が国の年度別・援助形態別実績（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）
（年度、単位：億円）

年度	円借款	無償資金協力	技術協力
2001年	—	0.56	1.45 (0.35)
2002年	—	0.49	1.82 (0.68)
2003年	—	0.01	1.33 (0.37)
2004年	—	—	1.38 (0.27)
2005年	—	—	0.02
累計	—	5.37	5.73

- 注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。
2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。
3. 2001～2004年度については、日本全体の技術協力事業の実績。2001～2004年度の（ ）内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2005年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示している。

表-5 我が国の対チェコ経済協力実績

（暦年、DAC集計ベース、単位：百万ドル、支出純額）

歴 年	政府貸付等	無償資金協力	技術協力	合 計
2001年	—	0.01	1.20	1.21
2002年	—	0.38	1.20	1.58
2003年	0.00	0.48	1.33	1.81
2004年	—	0.40	1.31	1.71
2005年	—	—	0.82	0.82
累計	0.56	4.24	19.15	23.94

出典) OECD/DAC

- 注) 1. 政府貸付等及び無償資金協力はこれまでに交換公文で決定した約束額のうち当該暦年中に実際に供与された金額（政府貸付等については、チェコ側の返済金額を差し引いた金額）。
2. 技術協力は、JICAによるもののほか、留学生受入や関係省庁及び地方自治体、公益法人による技術協力を含む。
3. 四捨五入の関係で、合計値が合わない場合がある。また、実績が少額のものについては値が0.00となっている。

表-6 諸外国の対チェコ経済協力実績

（暦年、DAC集計ベース、単位：百万ドル、支出純額）

歴 年	1位	2位	3位	4位	5位	うち日本	合 計
2000年	ドイツ 9.8	フランス 6.7	オーストリア 2.0	日本 1.8	デンマーク 1.4	1.8	25.3
2001年	ドイツ 9.8	フランス 5.5	オーストリア 4.0	オランダ 3.1	デンマーク 2.1	1.2	29.7
2002年	ドイツ 16.3	フランス 8.3	スイス 6.9	オーストリア 4.4	米国 2.5	1.6	48.5
2003年	ドイツ 18.5	フランス 9.7	オーストリア 4.8	日本 1.8	オランダ 1.7	1.8	43.2
2004年	ドイツ 18.2	フランス 11.4	オーストリア 5.7	オランダ 2.2	日本 1.7	1.7	42.8

出典) OECD/DAC

表-7 国際機関の対チェコ経済協力実績

（暦年、DAC集計ベース、単位：百万ドル、支出純額）

歴 年	1位	2位	3位	4位	5位	その他	合 計
2000年	CEC 409.9	GEF 0.7	UNHCR 0.51	UNTA 0.48	UNDP 0.2	0.1	411.9
2001年	CEC 282.0	UNHCR 0.7	UNTA 0.3	UNDP 0.14	EBRD 0.10	0.2	283.4
2002年	CEC 107.4	UNHCR 1.0	UNTA 0.4	EBRD 0.3	UNDP 0.1	0.1	109.3
2003年	CEC 217.3	UNTA 0.76	UNHCR 0.75	EBRD 0.2	UNDP 0.1	0.01	219.1
2004年	CEC 234.3	UNHCR 0.9	UNTA 0.4	EBRD 0.1	—	1.1	236.8

出典) OECD/DAC

- 注) 1. 順位は主要な国際機関についてのものを示している。
2. 四捨五入の関係で、合計値が合わない場合がある。

表－8 我が国の年度別・形態別実績詳細（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）
（年度、単位：億円）

年度	円 借 款	無 償 資 金 協 力	技 術 協 力
00年度 までの 累 計	なし	4.31億円 〔内訳は、2005年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/index/shiryo/jisseki.html)〕	4.05億円 研修員受入 139人 専門家派遣 8人 調査団派遣 1人 機材供与 35.25百万円
2001年	なし	0.56億円 ナープルステク博物館に対する保管用機材供与 (0.06) モラヴィア・シレジア国民劇場に対する音響・照明機材供与 (0.50)	1.45億円 (0.35億円) 59人 (11人) 3人 (1人) 0.03百万円 (0.03百万円) 32人
2002年	なし	0.49億円 パラツキー大学に対するLL及び視聴覚機材供与 (0.44) ブラハ国立美術館アジア館に対する美術品収蔵機材供与 (0.05)	1.82億円 (0.68億円) 40人 (18人) 3人 (1人) 16.24百万円 (16.24百万円) 35人
2003年	なし	0.01億円 チェコ・テレビに対する番組ソフト供与 (0.01)	1.33億円 (0.37億円) 28人 (9人) 4人 (1人) 2.62百万円 (2.62百万円) 38人
2004年	なし	なし	1.38億円 (0.27億円) 27人 (7人) 9人 41人
2005年	なし	なし	0.02億円 1人
2005年 度ま での 累 計	なし	5.37億円	5.73億円 研修員受入 185人 専門家派遣 11人 調査団派遣 1人 機材供与 65.69百万円

- 注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。
 2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。
 3. 2001～2004年度の技術協力においては、日本全体の技術協力の実績であり、2001～2004年度の（ ）内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2005年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計については2005年度までにJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。
 4. 調査団派遣にはプロジェクトファインディング調査、評価調査、基礎調査研究、委託調査等の各種調査・研究を含む。
 5. 四捨五入の関係で、累計値が合わない場合がある。